

## 大学生の発達障害

発達障害は、自閉症やアスペルガー障害、注意欠如・多動障害、学習障害など、子ども時代に始まる脳機能の障害です。学業も対人関係もうまくいかず困っている学生はいませんか？ もしかしたら、発達障害に起因する問題かもしれません。大学に入れるのに発達障害？ 違和感はあるかもしれませんが、だからこそ要注意！ 大学生における発達障害への支援を明らかにするために、今回の小特集を組みました。 (近藤清美)

### 大学生の発達障害サポートに最も必要なものは何か？

龍谷大学保健管理センター センター長  
須賀英道 (すが ひでみち)

#### Profile — 須賀英道

1984年、宮崎医科大学卒業。愛知医科大学精神神経科、京都大学大学院医学研究科講師を経て、2008年から現職。精神科医。専門は非定型精神病の診断基準研究のほか、ポジティブ心理学に基づくメンタルヘルス教育。主な著書は『操作的診断 vs 従来診断』(分担執筆、中山書店)、『ちょびヒゲ診療日記：京都編』(単著、静岡学術出版)など。



#### 発達障害は増えているのか？

近年、発達障害、特に青年期以降の大人の発達障害が急増している。これは元来の発達障害が増えているというよりも、発達障害概念が拡大し、その数が増加していることによる。うつ病が最近増加しているのと同じ傾向であり、近年のメディアによる精神科診断用語の一般化がもたらした現象といえよう。特に発達障害の診断は、平成17年に発達障害者支援法が制定されてから急速に一般化した。文部科学省による発達障害者に対する特別支援教育が推し進められ、教育現場での受容性が高められたことも大きい。

さらに、ネット上における発達障害という用語の普及によって、自身のタイプを運勢や性格判断と同じく、発達障害診断にも当てはめていることも、増加の一因として考えられる。実際、私は京都のクリニックで週に2回診療をしているが、発達障害かどうかの診

断を求めて毎週初診の成人患者が訪れる。その診断は、スペクトラム理論でみると、コミュニケーションが苦手な性格～軽度の発達障害傾向といった中間群がほとんどである。これは、10年ほど前までの精神科では異常なしとして対処されていたのである。これらの人がこの10年の間に、発達障害という診断枠に組み入れられていることを考えると、その数が増えているのは当然であろう。

ただ、問題はそんなに簡単に結論づけられない。近年の青少年の発育環境が大きな変容をみせているのも事実である。この問題は、最近の大学生の特徴をみると、数えきれないくらい挙げられる。コミュニケーション力の低下、人間関係の希薄化、学生生活におけるリスクマネジメント指向、チャレンジ精神の低下、自主性・好奇心の低下、孤独感への過剰な心配・不安、自尊心・自己肯定感の未熟性などである。これらの原因は社

会環境の変化が多面的に関連しているが、最も大きな要因は、地域コミュニケーションの希薄化による思いやりや妥協点の認知力の低下がもたらしたコミュニケーション力の低下である。そして、核家族化による過保護教育や自己中心的な養育態度によって幼児・児童期でのアイデンティティ成長を遅らせていることも大きい。さらに根本的には、現代社会が情報氾濫とその未消化な状態になっていることで、ポストモダニズム的にみると記号消費社会に入ってきていることであろう。人と人が直接対面してコミュニケーションをとることから、携帯&メール文化に変化しているのはその結果といえる。

このように問題点を巨視的にみると、発達障害が増えていることを悲観的にとらえがちとなるが、既にこうした視点にこそ大きな偏りのあることを知る必要がある。以下に従来の視点からの転換につ

いて述べていきたい。

### 大学の取り組み

大学では発達障害者の入学が増加していることから、サポート体制が整備されてきている。これはこれまでのフィルタリングによる入学者の制限から、大学全入時代になったことによって、サポート体制が必須のものとして教育分野で周知されていることであり、小・中・高における支援教育が大学に延長されてきたのである。そして、そこに求められるものは発達障害者の受容であり、身体障害に対して進められたグローバルな受容コンセプトが発達障害にも拡張してきたといえる。

現在、大学で行われているサポート体制にはいろいろあり、大学の学生数規模によって差異は認められるが、基本的には三つの視点からなっている。一つめは視覚情報の充実であり、聞き言葉が苦手であっても視覚情報によって理解度を高めることである。二つめは本人の抱える問題点の具体化で、課題の明確化と優先順位の規定によってストレスの軽減をはかる。三つめは対人緊張の緩和で、キャンパス内での過ごしやすい空間の提供である。そしてこれらのサポートが他の学生との共存の中で行われ、サポートコーディネーターがその橋渡しとなることが重要である。

当大学でのサポート体制を紹介したい。まだ現在企画中のものも含まれるが、概要は次の通りである。

**①発達障害者へのサポート導入として、入学時に情報を入手すること** ここでは入学時健診表において発達障害の既往歴とこれまでの支援についての情報を得るほか、自己記入式質問表 (PARS, ASRS) も参考記録として得ている。

**②サポートコーディネーターの配置** 生活・履修・研究・就職など多面的にケースワーカー的なアドバイスをする。また、障害のレベルに応じて専門医療機関、診療所、こころの相談室 (学生相談) での対応につなげる。

**③サポートコーディネーターを介した多者面談の施行** 本人、保護者、担当教官、キャリア、健康管理センタースタッフなどによる面談によって解決策を考える。ここでは卒後の社会参加へのサポートについても話し合われる。

**④くつろぎ空間の設置** 発達障害者が気軽に過ごせる空間であるが、一般学生も過ごせるようにサポートコーディネーターが介在する (企画中)。

**⑤一般学生のサポーターの配置 (企画中)** 一般学生にサポーターの希望者を募り、サポートコーディネーターのもとで学生同士のコミュニケーション力を高める企画を立てていく。

### 今後求められるコンセプト

上述したサポート体制についての基本的な考え方は、発達障害者に対する大学側からのユニバーサルデザイン的教育環境の提供である。すなわち、発達障害者の受容と共存であり、従来の医療視点とは大きく異なる。従来の医療視点とは病気の治療であり、アブノーマルの是正という認識に基づいている。しかし、現代社会が多様化し、物事が一元的にとらえられなくなってくると、コンセプトそのものも一元的に一つのアイデア体系から解釈されにくくなり、アブノーマルの是正が必ずしも妥当とはいえなくなる。いわゆるフランスの哲学者リオタールの言うように、「大きな物語」は無効であり、「小さな物語」の共存の解釈となるのである。発達障害とはまさに

この「小さな物語」の一つといえるかもしれない。そこには、障害の是正という視点はもはや存在せず、障害を一つの存在様式として認知することとなる。

具体的に、発達障害をみていると、コミュニケーション力が劣っているというよりも、IT 機器の利便性から生活空間におけるコミュニケーション様式が変容してきたのである。従来のコミュニケーション力の必要性は減り、その不自由さも少なくなっている。皮肉にも、IT 機器によってむしろ一人でもほとんどが充足されるような社会に近づきつつある。また、注意欠如や文字・計算力低下などについても、IT 技術の向上によって補填されているといえる。そして、こだわりの強さや過記憶といった他者とのコミュニケーションの中で浮上していた問題点も、視点を変えると、他にはない才能として有効利用が可能となる。

こうした適材適所の視点から、発達障害者の社会生活における役割分担が求められる。その際やや気になるのは、農業を主とした一次産業と生産産業を主とした二次産業が減少している最近の経済ベクトルの流れである。発達障害者の共存が容易なのは一次・二次産業分野であろう。現在の三次産業分野ではやはり対人コミュニケーション力が求められている。

今後は発達障害の特性を生かせるような、すなわち彼らの特性を求める産業界が必要となる。そして、発達障害の特性を個人的特性 (強み) として把握し、彼らが自身で磨きをかけられるような場を提供していくことこそ今後最も求められるサポートといえよう。